

令和3年東京都輸血状況調査集計結果(概要)

1 調査対象・回答率

(1) 目的

都内の医療機関における血液製剤の使用状況等を調査し、適切な血液製剤使用の推進をしていくための資料とする。

(2) 対象

都内にある病床数20床以上の医療機関：614箇所、令和3年1月～12月を調査対象期間とし、郵送にて実施。回収方法は、郵便、電子メール、ファクシミリのいずれかとした。

(3) 結果

504機関(回答率82.1%) (前年：615機関中493機関 同80.2%) から回答が得られ、うち一般病床100床以上の機関は194機関(同91.9%)であった。

得られた回答は「令和3年輸血状況調査集計結果(概要)」としてまとめるとともに、100床以上の194機関の回答を元に「評価指標」を作成した。

(4) 報告

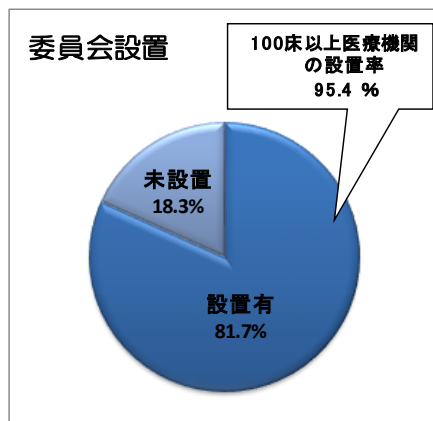
「令和3年輸血状況調査集計結果(概要)」「評価指標」を都ホームページにて掲載するとともに回答のあった全医療機関に送付する。また、100床以上の194機関については、「令和3年血液製剤適正使用推進に向けた評価指標について」(個票)を作成し送付する。

2 集計結果の概要(項目別)

(1) 輸血療法委員会の設置状況

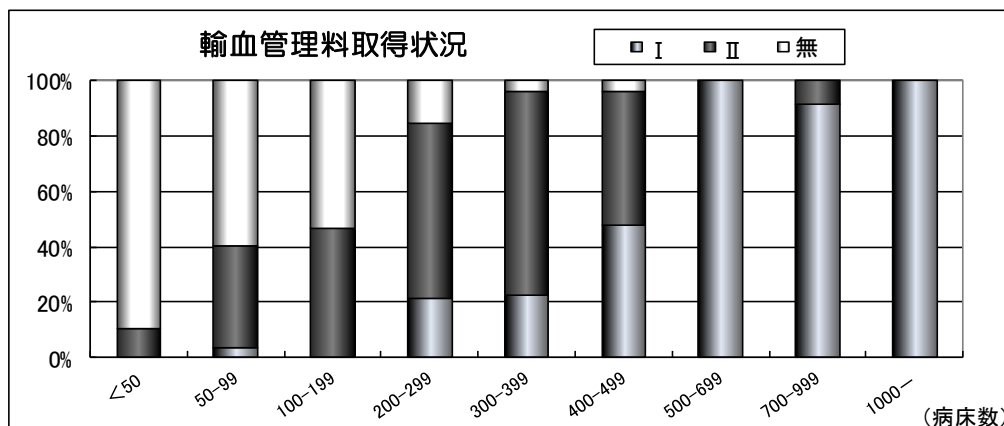
委員会を設置している医療機関は、412機関(81.7%)であった。
(前年402機関 81.5%)

一般病床100床以上の194機関で見ると、委員会設置は185機関(95.4%)であった。(前年186機関 96.8%)

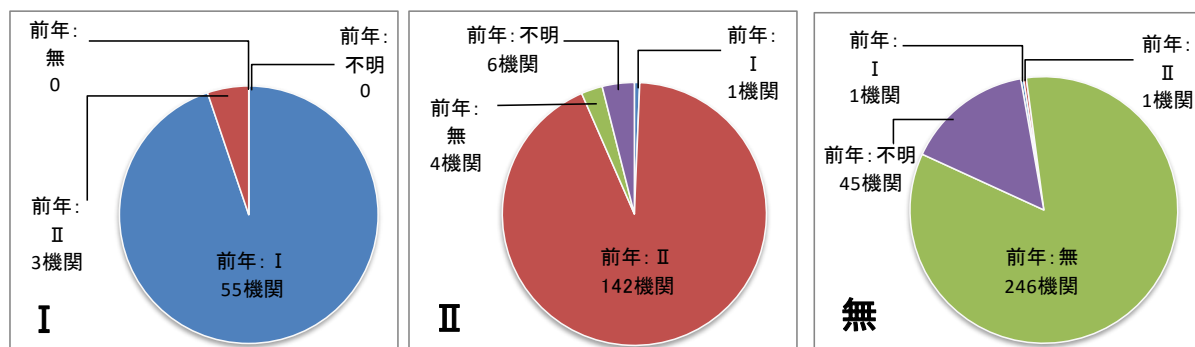


(2) 輸血管理料(I・II)の取得状況

取得機関は211機関(41.9%)で、内訳はI：58機関、II：153機関であった。(前年 209機関 42.4% I：57機関、II：152機関)



輸血管理料の取得状況の変化(前年対比)



(3) 院内採血の状況

採血者数は0人（前年：0人）、採血量は0U（前年：0U）であり、前年と同様である。

(4) 輸血用血液製剤の使用状況

ア 赤血球製剤の使用量は642,058Uで、前年625,712Uとほぼ横ばいである。

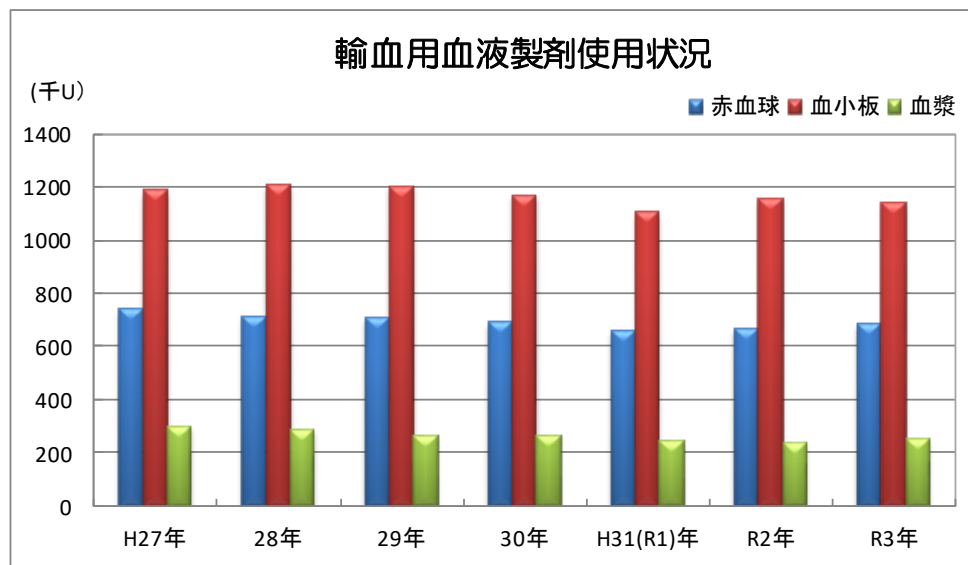
イ 血小板製剤の使用量は1,137,884Uで、前年1,155,146Uとほぼ横ばいである。

ウ 血漿製剤の使用量は253,590Uで、前年235,101Uとほぼ横ばいである。

エ 全血製剤（日赤製）の使用量は4Uで、前年10Uより減少した。

オ 白血球濃厚液の使用は5機関あり、使用対象は顆粒球輸血（1人）、ドナーリンパ球輸注（18人）であった。

カ 同種クリオプレシピテート作製本数は、新鮮凍結血漿（FFP）LR240 から95本（4機関）、LR480 から1,208本（8機関）であった。

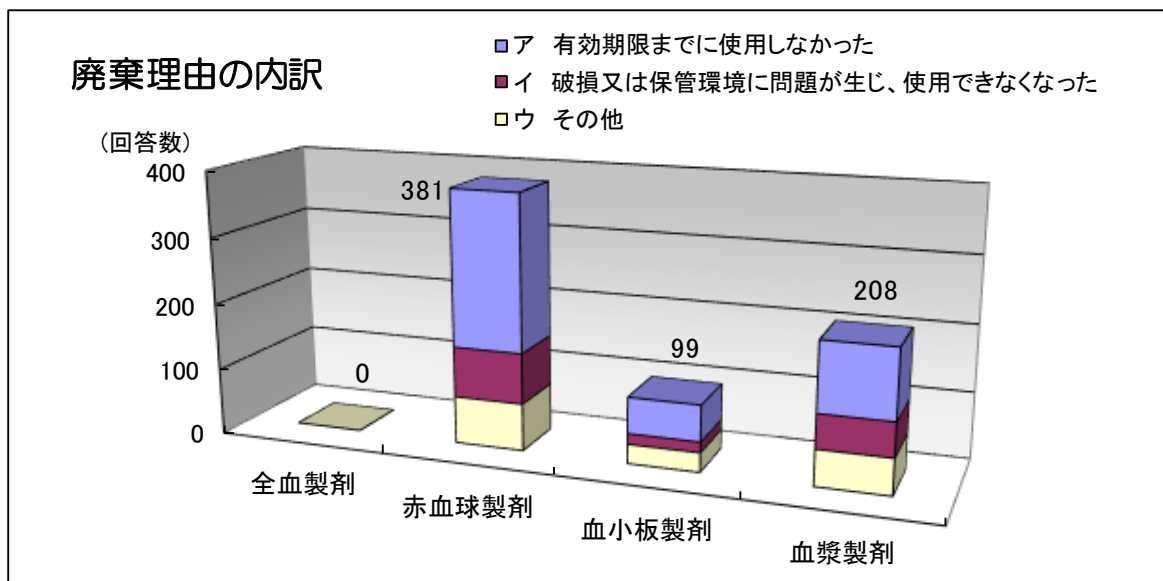
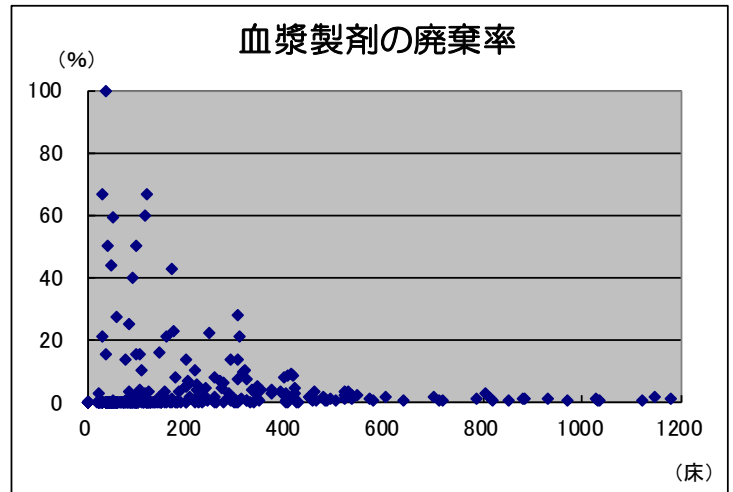
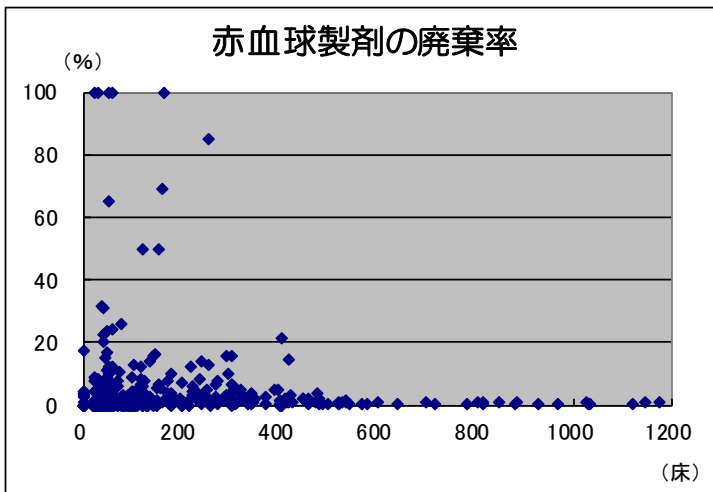
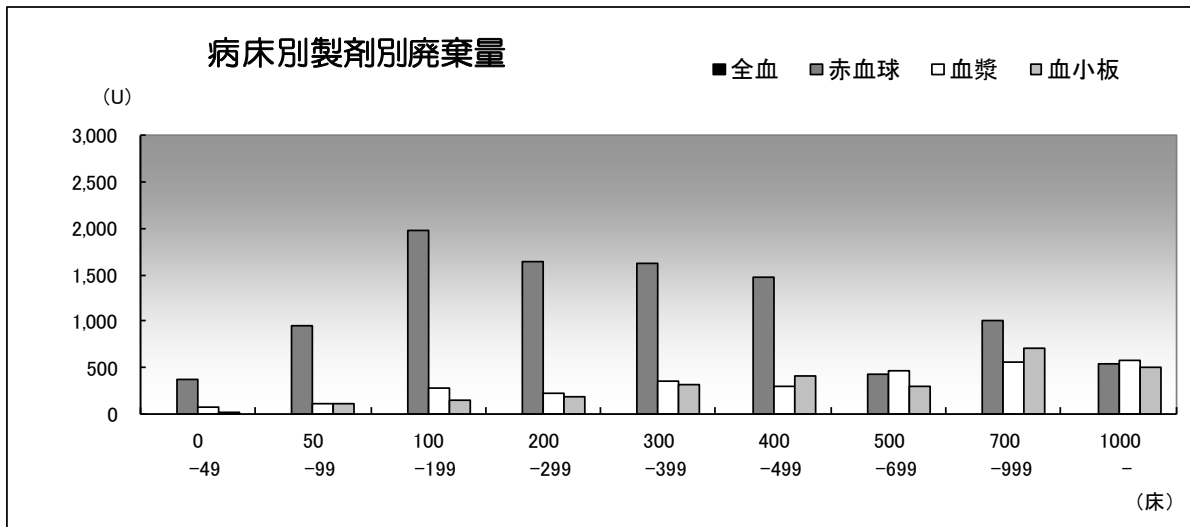


(5) GVHD予防のための放射線照射血液の使用状況

輸血用血液製剤使用病院398機関中の全てが照射血を使用しており、前年の100%と同様である。

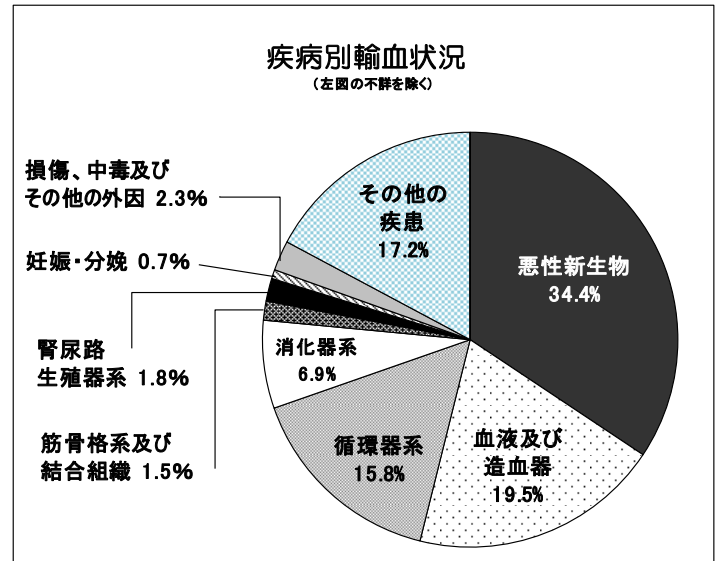
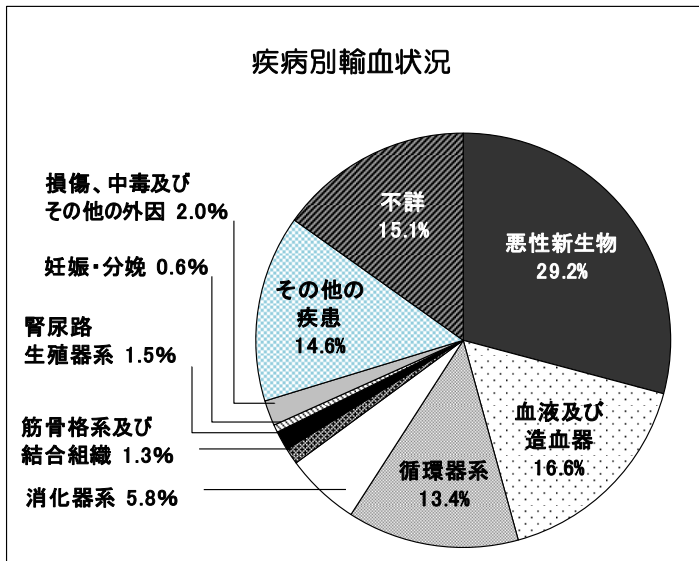
(6) 製剤別購入・廃棄量の状況

- ア 全血製剤の廃棄はなかった。
- イ 赤血球製剤の廃棄率は1.5%(10,025U)で、前年1.5%(9,255U)と横ばいである。
- ウ 血小板製剤の廃棄率は0.2%(2,700U)で、前年0.3%(2,962U)と横ばいである。
- エ 血漿製剤の廃棄率は1.1%(2,913U)で、前年1.5%(3,849U)より減少した。



(7) 疾病別及び年代別輸血状況

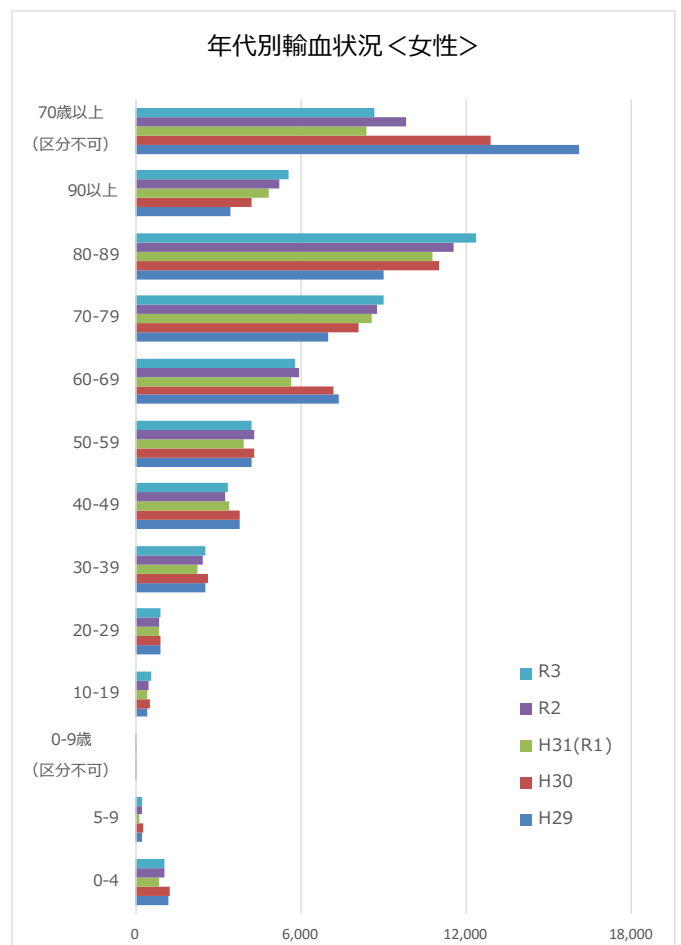
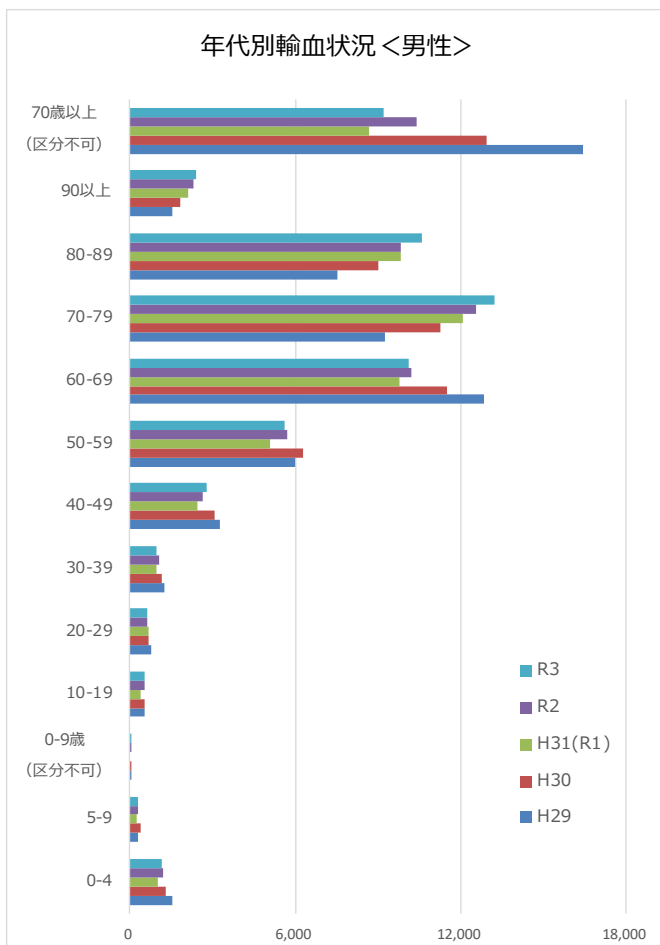
・疾病別では、悪性新生物の治療に全体の34.4%が使用されており、前年(36.4%)とほぼ同様である。

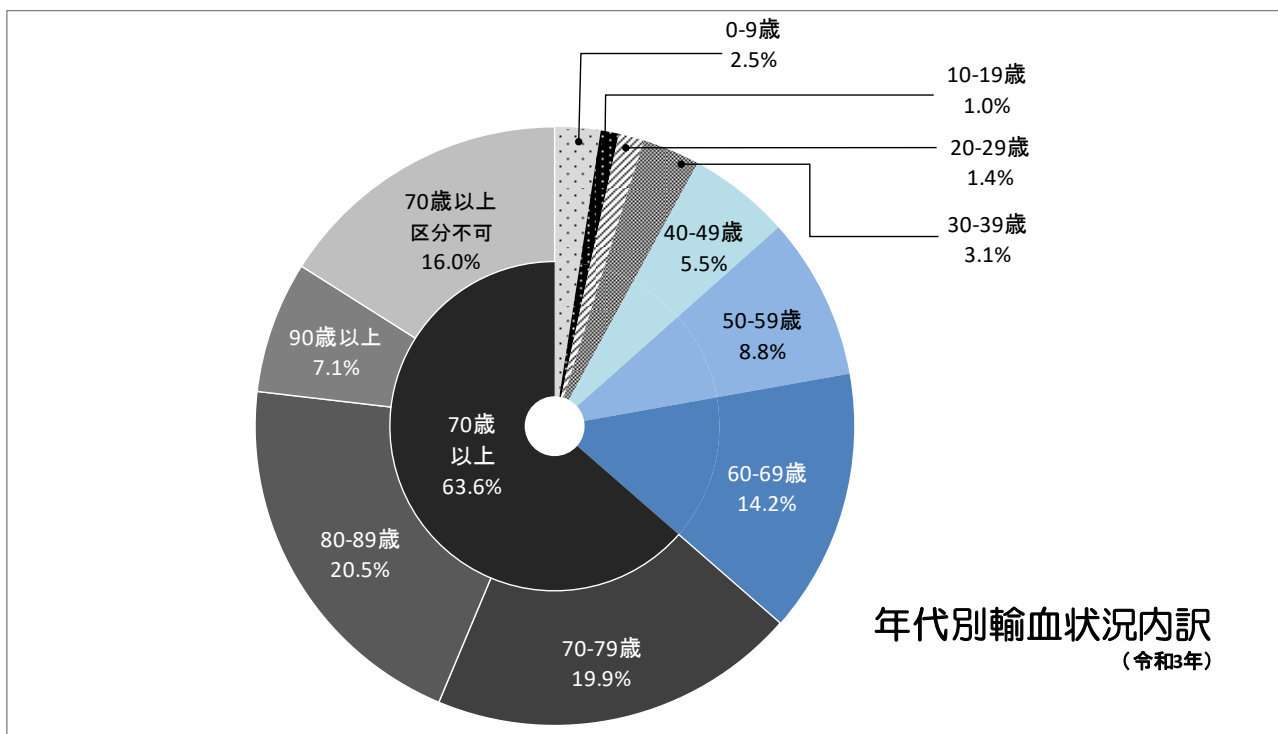


※構成比は小数点以下第2位を四捨五入しているため、合計は必ずしも100とはならない。

・年代別では、50歳以上の患者への使用が全体人数の86.6%、60歳以上 77.8%、70歳以上 63.6%で、いずれの区分でも前年(50歳以上86.8%、60歳以上 77.9%、70歳以上 63.4%)とほぼ同様である。

※同一人について:30日間の複数回使用は1人としてカウント。70歳以上で10歳ごとに区分できない年代については「区分不可」として合計値で表記。

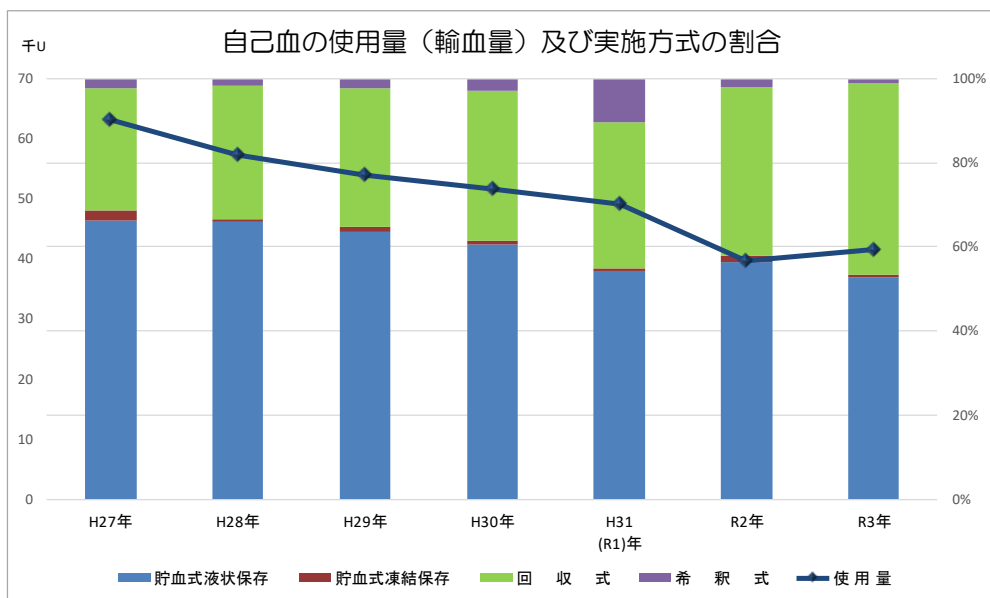




※構成比は小数点以下第2位を四捨五入しているため、合計は必ずしも100とはならない。

(8) 自己血輸血の状況

自己血の使用量(輸血量)は41,497.2Uで、前年(39,719.3U)と横ばいである。

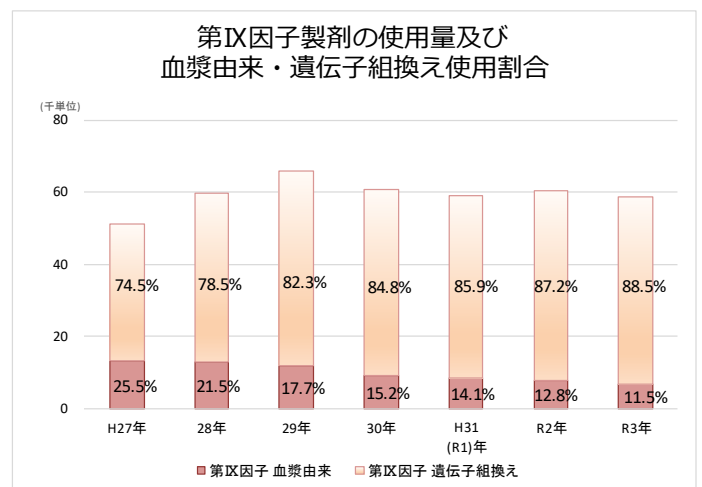
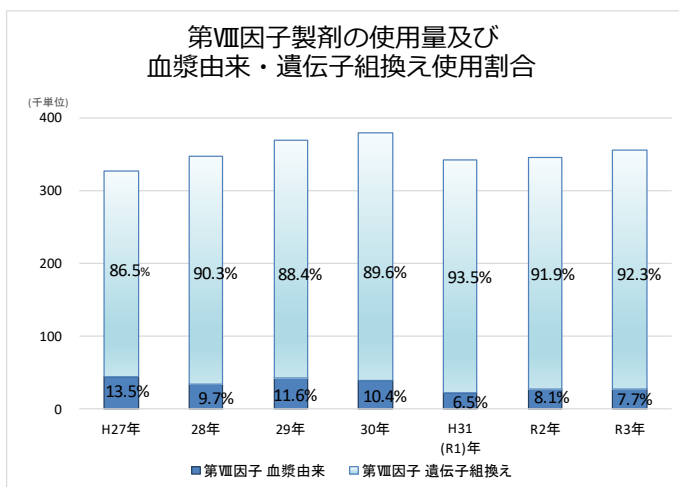
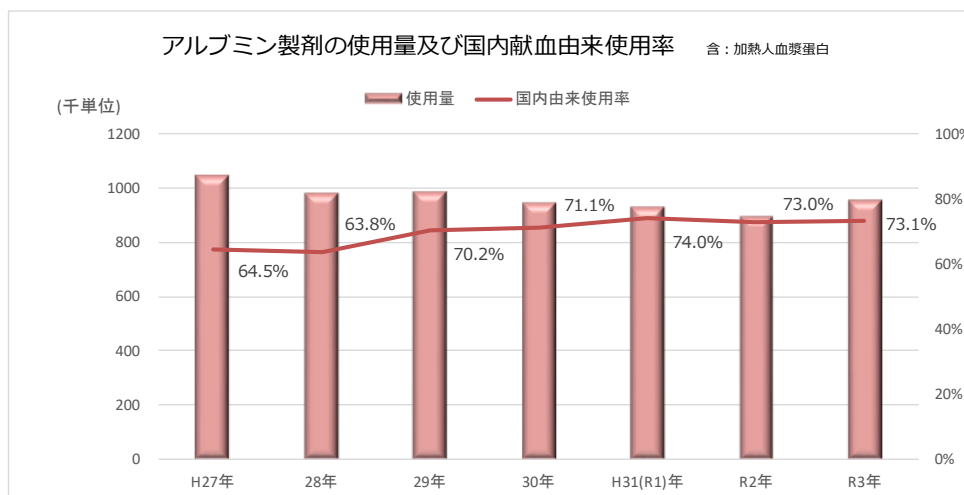
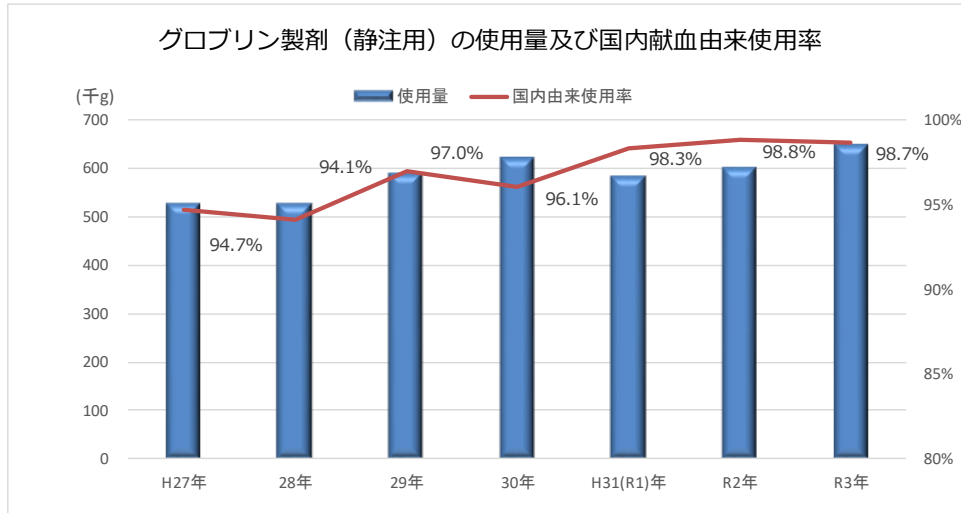


(9) 血漿分画製剤の使用状況

血漿分画製剤（トロンビン及び組織接着剤を含まない。）の使用量は484,176本で、前年（460,416本）より増加した。

なお、グロブリン製剤（静注用）の使用本数における国内献血由来製剤の割合は98.7%（128,963本）で、前年98.8%（123,503本）と国内自給率はほぼ同様である。

また、アルブミン製剤（加熱人血漿蛋白を含む。）の使用本数における国内献血由来製剤の割合は、73.1%（178,705本）で、前年73.0%（168,053本）と国内自給率はほぼ同様である。



※機能代替製剤、複合体製剤は除く。1単位=250IU